



間島秀徳二年ぶり二度目のステップスギャラリー個展である。今回は東海大学課程資格教育センター/松前記念館の篠原聡による企画であり、28日には間島秀徳×広瀬浩二郎(国立民族学博物館) 8月4日には間島秀徳×田中正史(小杉放菴記念日光美術館)のトーク、8月1日、8日には相良ゆみ(舞踏)によるコラボレーション公演といった、間島を多角的に捉えようとするイベントが充実した。画廊一杯の《Kinesis No.621》をはじめ、平面、立体の小品、版画作品まで展示され、間島の懐の深さが際立った。

《Kinesis No.621》はこれまでの作品同様、重層的な様相を呈してはいるのだが、これ以上に様々な技法が盛り込まれている。その為、絵画に必要なゲシュタルトが消滅している。すると《Kinesis No.621》は日本画どころか絵画であることから逸脱しているのではないかという仮説が成り立つ。それとも我々が絵画、彫刻、映像といった区分を前提に作品に向き合っている。それもあるだろうが、間島の想像力はまた異なる方へ向かっているのではないかと思えてならない。それは何か。

